

# 学級担任だからできる外国語活動・外国語科の授業づくり

## －小中連携を生かした英語教育の充実に向けて－

教職実践専攻・ミドルリーダー養成コース

学籍番号 19GP408 氏名 坂本 小百合

### 1 はじめに

本研究は、小学校の学級担任の英語力<sup>i</sup>を向上させ、学級担任が日常的に子どもたちと英語でやり取りできる授業を実現していくために、どのような研修や環境づくりが有効なのかを実践的に明らかにしようとするものである。小学校においては、学級担任がほぼ全教科を指導する体制となっているため、全教科の学習内容や学級の子ども一人ひとりの性格や学びの特徴について把握し、人間関係を築いている。英語教育の目標が「コミュニケーションを図る資質・能力」<sup>ii</sup>にあることを考えれば、学級担任だからこそ持っている子どもとの関係や情報を生かして、英語でやり取りしていく授業づくりが望まれる。とはいえ、小学校教員は、養成課程において英語教育についての専門的なトレーニングを受けてきていない。忙しい学校現場において、学級担任を務める小学校教員の研修意欲を高め、研修しやすい環境をどのようにつくっていくのかは、大きな課題である。

小学校の英語教育では、英語というコミュニケーション・ツールを通して、目的や場面・状況に応じて、子どもが考えや気持ちを伝え合う言語活動が重要である（直山 2019）。相手が伝えたい内容を一生懸命聞こうとする人、相手に分かってもらうためにどうしたらよいかを考えられる人になってほしいというメッセージを、授業を通して積極的に伝えていくところに小学校英語の大きな特徴がある。子どもたちが、英語が好き、コミュニケーションが楽しいと感じられる授業を実践するためには、子どもの実態把握ができていない学級担任の存在は、必要不可欠である。ALTや英語専科教員は子どもとネイティブに近い発音でやり取りはできるが、児童理解の面では学級担任には及ばない。デジタル教材は動画等も含み児童の興味を引き付けるが、地域や学校、子どもの実態にはそぐわない部分もあり、何よりも子どもとのやり取りができない。学級担任が日常の学びの全体像を知り、子どもたち一人ひとりの性格や思考や行動の特性を理解しているからこそ、学級担任との英語でのやり取りが子どもたちの思考に効果的に作用すると考えられる。このように、指導の中心には学級担任がふさわしく、ALTやデジタル教材を生かしながら子どもたちが主体的に学ぶ授業づくりをすることが大切だと考える。

新学習指導要領（2017 告示）では、これまでの「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」のうち、「話すこと」を「話すこと [やり取り]」と「話すこと [発表]」の2つの領域に分けた5領域が示された。これは、コミュニケーションとしての英語において、一方的に伝える発表だけでなく「やり取り」を重視することの表れとみることができる。「やり取り」を進めるためには、指導する教員自身が、英語でやり取りする能力を身に付けていく必要がある。そのために重要なのが、クラスルーム・イングリッシュである。文部科学省（2017）『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』には、クラスルーム・イングリッシュは、「英語の授業の雰囲気づくり」に役立ち、「児童が一生懸命に教師の英語を聞こうとする態度を引き出す」として、「指導者（日本人の教師）も英語を使うよいモデルとして、授業中の指示や質問にできるだけ英語を使うように努力したいものである」と記されている。同様に、村野井（2018）も、「授業の始ま

りに教師が英語であいさつをすることで、児童はこれから英語の授業に取り組むのだという心構え（レディネス）ができる」、「ふだん日本語を話す教師（主に担任）が英語を使うことで、児童に『自分自身も英語が使えるようになるかもしれない』と感じさせる身近なモデルを示すことができる」、「英語の授業でも担任が積極的に英語で話しかけることにより、児童の聞こうとする態度を引き出す」、「限られた時間の中で英語のインプットを少しでも増やす」等の効果を指摘している。

本研究は、①先行研究が指摘する「学級担任が英語で積極的に子どもとやり取りをする」ことの有効性が小学校でどのように認識され、実際の授業の中で発揮されているのかを、第一に検証する。その上で、②小学校教員の意欲を高める研修を行い、③学級担任が英語の授業に取り組みやすい環境を整え、その効果について検証していくことを目的とする。特に、②の小学校教員の意欲を高める研修として、小中学校の教員が子どもの学びの様子を見取りながら語り合う小中合同研修を実施する。中学校に進んだ子どもたちが小学校での英語の学びをどうとらえているのか、卒業生が中学校の教室でどう学んでいるのかを知ることによって、小学校教員の英語教育への意欲を高めることができると考えた。

## 2 研究の取組

### （1）本校の実態—これまでの外国語教育の取組と教員の意識

本校は、各学年2～3学級の比較的規模の大きい小学校である。2017年度から2年間、青森県教育委員会から事業指定を受け、英語教育の推進に力を注いできた。もともと素直で前向きな児童が多く、何事にも積極的に取り組む傾向にあったが、毎週水曜日をEnglish dayとし、全校で英語による挨拶を推進すると、どんな場面でも笑顔で明るく英語で挨拶する児童が増えた。また、本校は、2000年代から台湾の小学校と姉妹校提携を結んで相互に訪問し合ってきた歴史を有しており、2019年度の台湾からの来訪に向けて、前年度から台湾語の歌や挨拶の言葉を覚える等、全校で迎え入れる準備を行った。児童は、外国語活動に意欲的に取り組み、学級担任やALT、友達とのコミュニケーション活動を楽しみながら学んでいた。2018年度のアンケートでも「外国語活動の授業は好き」「自分からコミュニケーションをとろうとしている」「分からないがあっても、理解しようとしている」等の項目で約90%の肯定的な回答があった。

しかし、研究指定の2年間で改善されなかった課題もある。それが、教員の英語の授業への苦手意識である。2019年度のアンケートでは、「英語の授業に自信がある」は13%（23名中3名）、「英語の発音に自信がある」ではわずか8.7%（23名中2名）であった。英語の授業やコミュニケーション活動の重要性はほぼ100%実感しているにも関わらず、自らが授業を行うことを考えると大きなマイナスの感情が出てきてしまう。英語免許を取得していない小学校教員にとって、英語の授業が大きな負担となっているのは明らかである。

とはいえ、全ての教科を担当する小学校教員は、得意ではない教科であっても指導者として研鑽に励み、効果的な教材・教具、指導方法を活用して子どもたちに必要な能力を付けることに前向きであることが多い。英語の発音が苦手な教員は多いが、「グローバル社会の英語使用は、ネイティブ並みの発音の披露会ではなく、互いの幸せのために相互理解可能な範囲でそれぞれの訛りで語り合っている英語コミュニケーション」である（柳瀬・小泉2015）。10年後20年後の子どもたちの姿を考え、自らの中等・高等教育における英語学習を基礎として、コミュニケーション能力を重視した新学習指導要領の英語の授業に向き合っていくことが求められているのではないだろうか。そのための研修や環境づくりが、本校には必要であると考えた。

## (2) 研究方法

担任と英語専科教員の授業を観察するとともに、①及び②の実践を行い効果を検証した。

### ① 教員の意欲を高める研修の実施

#### a) 中学校1年生の生徒を対象にしたアンケート調査とそれを踏まえた研修の実施

小学校での外国語活動が中学校での英語学習に子どもたちの中でどうつながっているか、学区の中学校1年生を対象としたアンケートを2020年1月に実施した。その結果を、校内研修の素材として活用し、小学校教員の研修意欲の向上につなげることを企図した。

#### b) 学区内中学校の英語担当者と本校教員による合同研修会

夏季休業中に本校と学区内中学校が連携し、小学校6年と中学校1年の英語の授業を見合い、それぞれの学校の英語学習における子どもたちの学びや指導のつながりを意識した授業づくりのための具体策を検討した。小中混合グループによるワークを活用し、授業で実践できる具体的な改善策を協議し、発表した。

### ② クラスルーム・イングリッシュを使用しやすい環境づくり

授業の学習過程に沿ったクラスルーム・イングリッシュをまとめて掲示物を作成し、4月に教室内に掲示した。10月にも追加して、いつでも参照できるようにした。また、ALTと学級担任が日常的に英語で会話ができるよう、ALTの来校する水曜日を交流の日とし、昼休みの時間を活用して場を設けることを試みた。

以上の実践を踏まえ、学級担任や英語専科教員の英語の授業への意識や取組等について、次の方法で把握し、その効果を検証した。

- A) 3, 4年の学級担任と英語専科教員の授業をビデオで撮影するとともに、インタビューを行ってそれぞれどのような資源を使って子どもたちの意欲を引き出しているのかを比較分析し、担任が英語の授業をすることの有効性を検証した。
- B) 研修ごとの教員アンケート及び参与観察の記録から、教員の英語の授業への意欲を高めることを目指した研修の効果を検証した。
- C) 英語の掲示物について3～6年担任と専科教員に短いインタビューを行い、活用状況を検証した。また、ALTとの交流について一部教員にインタビューした。

## 3 研究の過程

### (1) 校内研修の展開

2020年2月から8月まで、4回にわたる校内研修を実施した。2月に実施した研修Ⅰでは本実践研究の趣旨を説明した。3月に実施した研修Ⅱでは、学区の中学校1年生を対象としたアンケート調査をもとに、本校卒業生と1年生全体の数値を比較し、本校での英語学習が中学校の英語学習にどのように影響を与えているかを協議した。6月には、研修Ⅲとして、筆者自身の英語の授業を公開し研究協議を行い、8月には学区の中学校英語科教員との小中合同研修会を、研修Ⅳとして実施した。

各研修の具体的な内容と教員の反応は以下の通りである。なお、研修は録音又は録画し、「」内の発言はそれを文字起こしたものである（〔〕は筆者による補足）。

#### 研修Ⅰ：筆者の実践研究の内容及び意図に関する説明（2020年2月）

学級担任が英語の授業実践をすることの意義、中学校での英語だけの授業を想定してクラスルーム・イングリッシュを増やす必要性、学級担任とALTとの交流等について説明し、参加した教員からも肯定的な反応が出された。一方、新たな実践として教科横断の単元づくりを提案したところ、新学習指導要領への移行期間の実践を踏まえて、「補助教材を使用して横断的なのは結構苦しい。それよりも授業の

中で〔その時間に学ばせたい英語表現を〕どう使わせるか。コミュニケーションをどのようにとらせるかを考えた方がよいのではないか」、「教科横断となると教科書から離れる危険性がある。今は、教科書をどう生かしていくかが大事」との発言があり、教科化に伴い教科書を使用しなければならない高学年の負担感が表れていた。研修Ⅰは、筆者にとって、実践研究を計画する上で、意欲向上に向けてどのような研修の在り方が望ましいかを再考する機会となった<sup>3)</sup>。

### 研修Ⅱ：英語学習に関するアンケート調査の結果報告と研修（2020年3月）

学区の中学1年生全体と本校の卒業生のアンケートの各項目の平均値を比較しながら、4人×6グループで、本校卒業生の傾向と本校の英語学習の特徴の関係について協議した。グループ編成の際は、研究指定された過去2年間の取組を2020年度着任職員も共有し、英語を研究することになった経緯や今後の指導に見通しを持てるように、新旧職員が混合するように配慮した。

その際の資料の一部が表1である。小学校での英語学習が中学校の授業で役立っていると感じている本校卒業生が多いこと、特に英語での挨拶や歌など本校で力を入れてきた取組の数値が高いことに多くの教員が目した。一方、中学校の授業では先生の言うことや仲間の発表を英語で聞くこと、ALTと英語でコミュニケーションをとることに数値が低く、「小学校と中学校のギャップを生徒が感じているのではないか」「中学1年生の授業はほぼ英語のみで行われるので、小学校の学級担任もクラスルーム・イングリッシュを積極的に使用し、少しでも中学校への接続を円滑になるように練習が必要なのではないか」等の意見が出された。

### 研修Ⅲ：校内研修の研究授業から学ぶ（2020年6月）

筆者自身の授業（『JUNIOR TOTAL ENGLISH』Lesson2 How many CDs do you have? 数・ねだん）を公開し、参観・協議を行った。令和2年度青森県英語教育連携推進事業小学校英語教育充実支援訪問として、県教育庁、教育事務所指導主事による指導・助言に加え、教育委員会指導主事からも授業に対する助言があった。

### 研修Ⅳ：英語学習にかかる小中合同研修会（2020年8月）

新型コロナの影響により開催が危ぶまれたが、調整を経て、7月に授業動画を撮影、8月に合同研修会を実施した。授業動画は、筆者が中学1年の2学級分を撮影・編集、本校6年分は、6年担任でもある研修主任が撮影・編集した。本校職員29名、学区中学校から英語科教員4名、教育委員会指導主事1名の計34名が参加した。

研修会は、動画による小学校・中学校それぞれの授業参観、グループ協議・発表、助言という流れで進行した。全体を4グループに分け、協議が活発に行われるよう各グループに中学校教員、低・中・高・特別支援担当教員を配置した。また、事前に2色の付箋を配り、授業動画参観の際に「聞きたいこと」「今後生かせそうなこ

表1：中学1年生の英語学習に関する意識  
(5件法)

		英語学習に関する調査アンケート(一部抜粋)	110人	46人
		実施日:令和2年1月9日 回答者:121名中110名	全体	本校
中学校の授業で	Q1-1	英語の授業や活動の時間は楽しい	4.42	4.28
	Q1-2	英語の授業や活動が得意だ	3.69	3.52
	Q1-3	英語の授業を理解している	4.00	3.91
	Q1-4	英語の授業に一生懸命取り組んでいる	4.62	4.54
	Q1-5	授業や活動を通して英語を上達させたいと思う	4.56	4.47
	Q1-6	いま学習していることはこの先役に立つと思う	4.56	4.58
	Q1-7	小学校での英語学習が中学校の授業で役立っていると思う	4.12	4.31
中学校の授業で楽しいこと	Q3-1	英語のあいさつ	4.20	4.33
	Q3-2	英語の歌	4.08	4.22
	Q3-3	英語のActivity	4.30	4.18
	Q3-4	外国の文化や生活について知ること	4.59	4.58
	Q3-5	英語の文のルールやしぐみについて学ぶこと	4.17	4.07
	Q3-6	英文の中から必要な情報を聞きとること	4.08	4.00
	Q3-7	先生の言うことや仲間の発表を英語で聞くこと	4.18	4.07
	Q3-8	先生や仲間とのやりとりの中で聞くこと	4.18	4.13
	Q3-9	日常会話、Q&Aを英語でやり取りする練習	4.10	4.13
	Q3-10	自分の考えや気持ちを英語で話すこと	4.01	4.00
	Q3-11	先生や仲間とのやり取りのなかで伝え合うこと	4.02	3.93
Q3-12	ALTと英語でコミュニケーションをとること	4.24	4.11	
Q3-13	単語や英文を音読すること	4.13	4.04	
Q3-14	英文の中から必要な情報を読み取ること	4.09	4.05	
Q3-15	英文を読んで話の概要をつかむこと	4.02	3.87	
Q3-16	英単語のつづりを覚えて書くこと	4.17	4.13	
Q3-17	基本的な英文を書くこと	4.21	4.21	
Q3-18	自分の考えや気持ちを英語で書くこと	4.00	3.90	

と」を記入してもらいながら進め、協議時間を確保できるよう配慮した。協議では、模造紙にそれぞれの付箋紙を貼ってグルーピングし、まとめていった。「聞きたいこと」では、小・中学校それぞれで使用している教材・教具、単語の習得方法、書く活動についての質問が多かった。疑問点については、その場で、それぞれの先生方から回答をしてもらい、全体で共有した。ここで疑問点を解決できたことにより、次の「今後生かせそうなこと」に焦点化して話し合いを進めることができた。小学校から中学校への学びのつながりを意識した授業改善に向けて、最終的にポイントを3つ程度に絞ってグループごとに発表してもらった。

(2) クラスルーム・イングリッシュを使用しやすい環境づくり

学級担任がクラスルーム・イングリッシュを使いやすくする2つの取組を行った。

1つは、教師用及び児童用の掲示物の作成と掲示、もう1つは、ALTと学級担任が日常的に英語で会話ができる場の設定である。教師用掲示物は、2020年4月には6枚、10月には新たに2枚追加作成し、全部で38表現のクラスルーム・イングリッシュが、常時教室で確認できる環境を整えた(図1)。子どもたちについても、授業中に友達を褒めたり認めたりできるようにイラストを掲載した掲示物1枚を用意し、こちらも4月から各学級に掲示した(図2)。

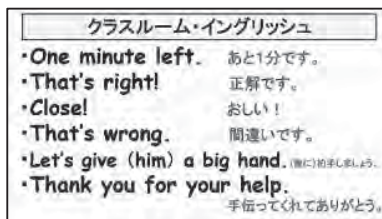
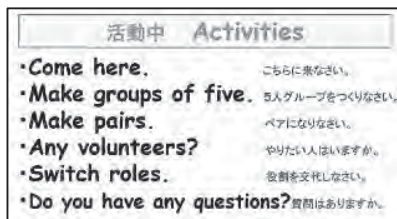


図1：教員用掲示物（左：4月，右：10月）

図2：児童用掲示物

4 成果の検証

(1) 担任が英語の授業をすることの有効性についての検証

今年度は結果的に、筆者が所属する5学年以外は、専科教員がほとんどの英語授業を担当し、担任は校内で英語の研究授業の単元のみを担当した。このため、観察対象は、前期前半から研究授業を開始した担任のB教諭とD教諭、専科のJ講師のみで、それぞれ2時間ずつビデオを撮影し、それを踏まえてインタビューを行った。

① ビデオ映像の分析

ここでは、特に子どもと教員の英語を交えた応答に注目してD教諭とJ専科の授業データを示し、両者が子どもの発話を引き出すために使っている資源を比較する。

D教諭の授業は、文房具など学校で使う物について尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ単元の、導入に当たる場面である。D教諭が、かばんに入っているたぐさんの文房具を子どもたちに見せながら、単元に見通しを持たせている([DATA1])。

**DATA1** 2020年6月26日 ビデオ撮影  
 単元:Let's try! 2 Unit5 Do you have a pen? T1:D教諭, A:ALT, C※:大勢の児童。英語の発話はアルファベット、日本語の発話は日本語表記

T1:(定規を見せながら)I have one ruler. What color?  
 C※:Pink!  
 T1:Why?  
 C※:〇〇先生(D教諭)がピンク好きだから!  
 T1:I like pink.  
 A:(T1が赤ペンを見せたときに)What's this?  
 C※:Pen.  
 A:What color?  
 C※:Red.  
 (この後、青ペン、ピンク色の鉛筆削りやタブレットカバーも見せた。)  
 T1:ある先生にPencil caseを作ってきました。  
 (黄緑色の筆箱絵カードを見せながら)ちよっと予想して。  
 C※:〇〇先生! △△先生!  
 T1:なぜ〇〇先生?  
 C※:緑が好きだから。  
 T1:Answer is 〇〇先生。

**DATA2** 2020年11月27日 ビデオ撮影  
 単元:Let's try! 1 Unit7 This is for you.  
 T1:J専科, A:ALT, C1~4:児童, C※:大勢の児童

T1:お店屋さんの台詞が分からないとだめだね。  
 OK.じゃあDemonstration.  
 A:(胸に手を当てて)I am a shopkeeper.  
 C1:Shop. Shop.  
 C※:あ, 店員さん。店員さんだ。  
 T1:(バッグを持っているふりをしながら)  
 I am a customer. Customer. Ok.  
 C2:お買い物さんだ。  
 C3:お買い物。ショッピング。  
 C※:お客さん。  
 T1:(腕を広げて)Here is a shape shop. Shape shop.  
 C4:形の店だ。  
 T1:(目と耳に手を当てながら)Please watch and listen.  
 A:(腕を動かして)What do you want?  
 T1:Green triangle, please.  
 A:(腕を広げて)How many?  
 T1:(指を4本立てながら)Four please.  
 A:Here you are.  
 T1:Thank you.

る資源に違いがあることが分かる。担任だからこそ持っている資源に一定の有効性はあるものの、その英語使用量はまだ少ない。今後、専科が持つ英語のコミュニケーションスキルや方法論を学ぶことで、担任がさらに力を発揮できる状況をつくることが求められる。

## ② インタビューの分析

D教諭へは2020年12月16日、B教諭へは12月17日、J専科へは12月21日に、英語の授業実践や掲示物の使用等について、各50分程度のインタビューを行った(表2)。記録は本人の了承を得て録音した。学級担任にはインタビューの冒頭で、英語の授業実践についての率直な感想を尋ねた。担任は、自らが英語の授業をする必要性を強く感じ、大きな負担と悩みを抱えながら授業していた(DATA3)。学級担任が授業するよさについて尋ねると、D教諭はDATA1の場面を学級担任だからこそ持っている情報を生かしたものと認識し、B教諭は「普段の子どもが見えている」ことを挙げた(DATA4)。そして、DATA5に示すように、B教諭は実際に研修会を探す等の行動を起こし、D教諭も前向きな気持ちを語り、負担感ばかりでなく楽しさを感じていた。専科の授業に対しては、2名ともJ専科の持つ英語のコミュニケーションスキルと授業展開の方法に、自分にはない魅力を感じていた(DATA6)。この点については、専科自身も、場面を工夫することで子どもたち自身がその日のテーマとなる表現に気付き、実際に使

J専科による授業は、形の言い方、欲しい物の尋ね方と答え方に慣れ親しむことをねらいとする単元の終盤の時間である。J専科とALTが、友達にカードを贈るために店で色々な形を集める際のデモンストレーションを行っている(DATA2)。

D教諭は、「担任である自分が好きな色を子どもたちが知っている」という情報をもとに子どもたちの反応を引き出し、J専科は、英語のコミュニケーションスキルを使いながら、目的や場面・状況を明確にして英語表現の必要感を持たせるような授業展開によって、子どもたちの発話を引き出している。担任と専科では、子どもの関心を引き出すために使える

表2:インタビュー対象者一覧

対象者	性別	年齢	経験年数	英語の授業担当経験
B教諭	男性	20代前半	2年目	今年度2単元 Let's Try!1 Unit6 ALPHABET Let's Try!1 Unit5 What do you like?
D教諭	男性	20代後半	3年目	昨年度1単元 Let's Try!1 Unit4 I like blue. 今年度1単元 Let's Try!2 Unit5 Do you have a pen?
J専科	女性	40代後半	常勤講師 (小学校学 担経験有)	・中学校での英語指導経験有 ・英語専科教員3年目 ・今年度は、5学年を除く3,4,6学年の外国語の授業を担当

### DATA3 インタビュー:英語の授業実践への率直な感想

B教諭:アルファベットは本当の最初の授業。撃沈しました。子どもたちものらないし、自分も盛り上げきれずに終わってしまった。(Unit)5は、子どもたちを楽しませるために、自分はきつかった。楽しめなかった。でも確実に(Unit)5の方が楽しめた。

D教諭:これから絶対やっていかななくてはならない教科なので勉強になった。もっとやっていかなきゃ。一番足りないのは自分の英語力。とっさに出てこない。ALTにうまく伝わらない。ALTに頼っていた。自分の中でちくちくしていた。

### DATA4 インタビュー:学級担任だからできること

B教諭:普段から先生が一生懸命授業で英語を使っているのだから、子どもたちも一生懸命英語をやらなきゃということは伝わっていると思う。あまり英語が嫌いな子はいない。(英語は)決まてできないし、英検とかTOEICとかも持っているわけでもないし、自信は1です。英語は得意不得意と、授業のうまい下手は小学校だとまた違うのかなって。自分の自信にもなったんですよ、この校内研をやって。ばりばりの英語じゃなくても、授業は出来るんだなって。日本語の授業だったら、あの子に動いてもらえればクラスが動くってわかるんですけど、それが英語ってなるとなかなかうまくいかない。でもそれが慣れてくれば、学担はやっぱ普段の子どもたちが見えているので。

D教諭:(ビデオの時の授業を振り返って)子どもは担任の好きな色を知っているからできたこと。導入の時も誰のために作った筆箱なんだろうとしたときに、子どもたちは「黄緑はG先生じゃない?」と言う。ピンクだったらD先生(本人)ってなる。

いたいと思える展開を意識していた (DATA7)。さらに、J専科は DATA8 のように、専科の立場から見ても、学級担任が英語の授業を担当する意義は大きいと指摘していた。

③ 考察

ビデオ分析でも確認したように、学級担任と専科では現時点で使える資源が異なっている。子どもたちが獲得している情報を知り得ることは担任の強みであるが、英語でコミュニケーションを図ることはあまりできていなかった。しかし、インタビューを通して、担任は英語ができないからと授業を拒否しているわけではなく、前向きに考えていること、また、研修会への参加希望など高い研修意欲も見られた。日常のコミュニケーションで培った関係性と子どもについて獲得している情報を、今以上に英語の授業で生かすことができれば、担任も十分、授業で子どもと生きた英語のやり取りを進めることができると考えられる。学級担任による充実した英語の授業のためには、専科が持っている授業の組み立てやスキルを身に付ける研修が保障されること、それを授業で実践する機会をたくさん持てるようにすることが重要であろう。今年度のように研究授業のための一単元のみを担当するだけでは経験として十分ではなく、求められる英語の力を身に付けることはできない。専科が持っているスキルや授業展開の方法を、担任が身に付けるための方策の検討が必要である。次に、今年度の研修や環境づくりの効果について検証する。

DATA5 インタビュー:担任の英語の授業に対する思い

B教諭:(授業をしているときは)好きです。好きでした。やっぱりやってみないとだめですね。やって苦しんでうまくできて楽しい。授業していた時は、研修会ないのかなって調べたりした。そんな研修の機会があれば受けたい。

D教諭:いちばん、殻を破っている授業。自分で考えるのはすごく多かった。考えるのは楽しかった。このアクティビティはいいんだろうかと考えることは楽しかった。授業自体は、やってるのはすごく緊張が勝っています。汗が滝のように。知らぬ間に声を張っている。ハイじゃなきゃいけない。テンション上げないとだめだと思って。

DATA6 インタビュー:担任が感じる専科授業の特徴

B教諭:J専科は、(活動の説明をする前にまず)子どもたちにやってみさせて、失敗させて。自分は(授業を進めていく)自信がない。これも練習しなきゃって色々確認してから(だから)子どもが飽きる。活動が積極的ではない。飽きれば(子どもは)すぐに出る。それはわかる。活動的なJ専科、(教え込む)授業っていう自分。

D教諭:J専科はいろいろ引き出してくれる。英語を使って、分かりやすく教えること。英語が使えるのがうらやましい。子どもたちが分からない英語に対してすぐに教えてあげられるのはすごいなあ。進める流れもまだまだだ。 (J専科は)何のためのアクティビティなのかを子どもたちにも意識させている。何のためのアクティビティなのかということ自分を流してしまおう。活動と活動をつなげる指導がうまい。配慮が細かい。細かくないと子どもたちに入らない。活動に必然性は必要であると一年目に教わったのだが、外国語はそれが顕著に出る。何のために?を子どもたちにも意識させている。

DATA7 インタビュー:専科教員が行っている工夫

J専科:とにかく、子どもたちに考えさせる。Guessです、Guess!ただこっちで教えるんじゃないか「今なんて言ったと思う?」っていうようなその想像がないと、英語は無理です。なんかわかんないけど、あれ、チョコレートって聞こえたってなったらチョコレートから想像しますよね。チョコレート食べたいのかな。チョコレート好きなのかなっていうのを考えさせていくっていうのが非常に大事なことです。最初のスモールトークが子どもたちに非常に大事な。授業に入る前に今日こんなことするんだ、これと言えればいいのかみたいなちょっとしたゴールを。そこを考えさせてつたむ。今日これをやればいいのかというゴールが見えるかな。ちょっと考えてみて。想像してみて。どの研修会に行ってもよく言われる。子どもから引き出していく。こっちからいうのではなく、そこが大事。

DATA8 インタビュー:担任が授業する意義

J専科:子どもの実態を知らない私がやっても、子どもをうまく使えない。この時間でしか浮かび上がらない子もいるかもしれない。そういう子をみんなの前で、この子こういういいところがあるのねっていうのを学級経営を含めながらできたほうが絶対、コミュニケーションなので、学級経営としてはすごくいいと思う。

(2) 研修の成果についての検証

本実践研究の説明が中心だった研修Ⅰ以外は、事後にアンケートを実施した。結果は表3のとおりである。「英語の授業づくりへの意欲が高まった」の項目において、研修Ⅱ→研修Ⅲ→研修Ⅳと数値が上昇し、一連の研修を通じて意欲の向上が示された。

表3:校内研修後のアンケート結果 (6件法)

	研修Ⅱ n=21	研修Ⅲ n=24	研修Ⅳ n=25
研修は有意義であった	5.52	5.63	5.60
英語の授業づくりへの意欲が高まった	4.95	5.04	5.38
積極的な意見交流ができた	5.29	5.17	5.12

研修Ⅰ:筆者の実践研究の内容及び意図に関する説明(2020年2月)

研修終了後、大学院に戻った筆者が関与しないところで、研修に刺激を受けた教員による自主的な取組が始まった。「出張英会話講座 Classroom Englishの達人

になろう！」である。新型コロナの影響で外国語の授業が無いALTのべ6名が来校し、1時間のクラスルーム・イングリッシュの練習を3日間行った。教員の参加はのべ23名となり、「普段から毎日30分くらいやってもいい」「楽しく練習できた」等の感想が聞かれた。このことから、今回の研修は、教員の意欲を向上させたと考えられる。

#### 研修Ⅱ：英語学習に関するアンケート調査の結果報告と研修（2020年3月）

今回の研修を通して、本校教員は中学校の英語の授業に興味を持ち、研修の最後に小中合同研修会の予定を伝えた際にも肯定的な反応が返ってきた。

#### 研修Ⅲ：校内研修の研究授業から学ぶ（2020年6月）

事後アンケートには、次のような記述が見られた。体育教科担当は、「もっと英語に慣れ親しむ必要が子どもにも我々にもあると思うので、体育の授業中に使う指示を英語にして一覧を作り、講堂の壁に貼って英語で指示を出すようにする」と記し、数日後には実際に掲示されていた。他にも、「Small talkをひろげていくには児童理解が重要である」、「雰囲気の良い授業＝学級経営がよい」との記述が見られ、複数の教員が研修を通じて、児童理解のできている学級担任がALTと共に英語の授業づくりをする利点を感じたことがわかる。ここから、多くの教員が授業づくりに真剣に向き合ったと言えるだろう。

#### 研修Ⅳ：英語学習にかかる小中合同研修会（2020年8月）

小学校と中学校両方の授業動画を参観したことにより、グループ協議では具体的な授業場面や活動について活発な意見交流が行われていた（図3）。

市教育委員会指導主事の助言に対する感想には、「中学校と小学校の違いが明確になった」「目的、場面、状況を大事にした授業づくりをしていきたい」等の記述があり、研修を通して、それぞれの学校で目指すべき子どもの姿について共通の理解を持つことができたことが分かる。

事後のアンケートでは、中学校の先生方から「小学校の取組を具体的に知ることができて、大変有意義なものとなった」等の感想をいただいた。また、本校教員からも、「中学校の授業へのイメージがとても高まったので、大変効果的だった」「中学校の先生から直接話が聞けて、（こちらの取組も話せて）情報交換ができてよかった」等、今後の授業改善に向けて、前向きな感想が多く見られた。

以上から、中学校教員との合同研修会は、小学校教員の英語の授業に対する意識を高め、学びたい意欲を引き出し、学級担任が英語の授業をすることの意味やクラスルーム・イングリッシュを使用することの重要性をより認識することにつながったと言える。

### （3）環境づくりに関する成果の検証

#### ① 掲示物に関するインタビューのまとめ

インタビューから、掲示物は、授業実践に関わらず、ほとんどの教員が活用していることが分かり、ある程度の効果があったことが確認できた（**DATA9**）。クラスルーム・イングリッシュとして教師用と児童用の2種類を作成したが、高学年にな

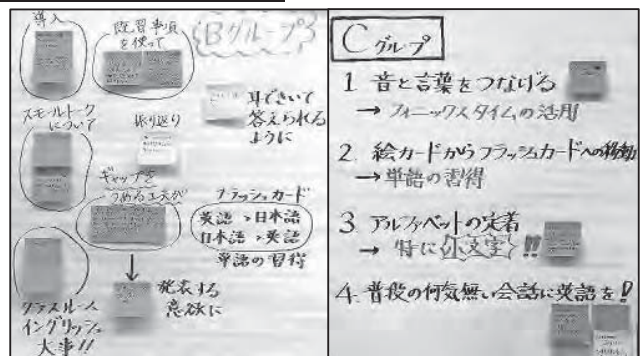


図3：小中合同研修会 協議のまとめ



るほど教員も児童も区別なく活用していた。また、話すためだけでなく、児童が文字を書き写す際に使用していることも分かった。

しかし、掲示物が担任の英語使用量を劇的に変えたわけではない。E教諭は、5年の英語授業を自ら実践し、英語の使用頻度が高い。なぜ使えるのかを尋ねたところ、「今までずっとやってきたから。ずっと授業はしてきたよ。使えないけど、やっていくうちにちょっとずつ増えてきているっていうだけの話で。もともとしゃべれたわけじゃない。」と話してくれた。「使おうとすれば、意識しないと、そうしていかないと増えるわけない。やっぱその積み重ねなんだよね」。英語を使った授業をする上で、掲示物は補助的な役割に過ぎず、実際の授業で学級担任が英語を使用し続けることが最も重要であることが端的に語られていた。

**DATA9** 実施日—B教諭 2020年12月17日, D教諭 12月16日, 他は12月23日。  
A~F教諭は担任として英語の授業を担当。G~I教諭は担当なし。  
J専科は, 3, 4, 6年の授業を担当。

A教諭	大体言える(から掲示物は使っていない)。大体だよ。でもみんな助かるんじゃないのかなと思うよ。絶対使ってると思う。
B教諭	研究授業に向けてかなり使った。授業では見なくても頭に入っている状態になるまで見て覚えた。教室にあるから見ることでよかった。授業をやらないと英語を使う量が減ったし、掲示物も見ない。
C教諭	めっちゃ見ました。(子どもに)「先生、いつもカンニングしてるね」って言われてました。英語だけでなく国語とか算数とか違う授業でも、配るときとか物出るとかしまうとか言いたいのに出てこないから。(言いたい表現がないときは)後で調べたりとかしました。(昨年と比較すると)0が1になったくらいかもしれないし、1が2になったくらいかもしれないですけど、ちょっと自分が楽しもうという気持ちにはなったと思います。(英語は)使用することが増えたとし、使わなくては、という意識が変わった。
D教諭	休み時間や給食時間に見て確認していた。ふとした時でも使えるようになった。「活動中」の掲示物が使いやすい。子どもたちも教師用と児童用の両方を見ていた。メモしている子もいた。子どもはジェスチャーをつけて使っている。
E教諭	授業中には見ない。新しい表現あったかなあと確認する程度。ALTが指示しているのを聞いて真似している。
F教諭	私はめっちゃ見えています。(活用)しました、しました。流暢には出てこないですけど。給食食べながら(見た)。(英語の授業が初めてだから授業する前に)指差し確認。(今は授業していないから)見ないけど、その時やったものが何となくあるので、必要ないときに言ったりしている。役に立っています。(授業をする)最初の方は見えました。めっちゃ見えました。
G教諭	授業していないから、たまあに(見て使用する)。評価の言葉あるじゃん。(児童用の褒め言葉の掲示物は子どもが見ながら)喜んで書きます。短い。
H教諭	(授業は)全くしていない。使おうとはした。でも「先生、何上見てんですか」って。本当に真似っこするくらいだから。あれもっと大きい方がいいね。欲を言えば、子どもたちも見るといいじゃん。先生用っていうよりさ、子どもたちがあれ使ってくるじゃん。書くのもあるでしょ。これ書いてもいいんだよって言ったときに、やっぱりちょっと見えないから(イラストを無くして)言葉だけでもいいのかなって思う。興味ある子は休み時間とかにも見ているわけだから。
I教諭	授業していないもん。給食食いながら確認はしてるよ。あそこに張るアイデアはすごくいい。全部読むことはない。思い出すきっかけになっただけ。
J専科	C教諭はすごい見て言った。あれ言いたいなって言ってもここ(掲示物)から探すのは苦しい。使っていくしか。使うようにしていくのが(いいけれど)、分かんないのは聞けば。(掲示物は)あれば見ている。

#### (4) ALTとの交流に関する検証

当初は、全教員によるALTとの交流を想定したが、実際には勤務体系上難しく、交流が可能な昼休みに職員室へ入る教員は限られた。ただし、ALTの席に近い5学年の担任団は、比較的日常的に会話を交わすような環境ができてきた。限定的ではあるが、クラスルーム・イングリッシュや授業で学ぶ表現を確認したり、週末の過ごし方や予定を話したりする等、担任側から積極的に話しかけ、コミュニケーションを図った。次第にALTから話しかけることも増え、授業での活動の提案をすることもあった。E教諭は、「意識して話したよ。水曜日は結構話した。授業するために関係性をよくするために努力をしたよ。」と述べている。普段からのコミュニケーションが授業でのコミュニケーションにつながることを考えれば、担任とALTが英

語でやり取りをする時間の確保は、今後必要になると考える。ただ、昼休みは時間的に厳しいので、放課後の15分程度の時間を使い、研修Ⅰ終了後に実施された、「出張英会話講座」のような実践研修を行うことができればよいのではないかと考える。

本校が所在する市は、ALTの職務内容として「外国語担当教員等に対する現職研修の補助」を取扱要綱に示している。英語の授業の補助に加え、学級担任の英語力向上につながる活動にもALTを活用していくことが重要であろう。研修の機会を増やし、授業実践を積み重ねていくことが、英語力の向上にもつながるのではないかと考える。

## 5 成果と課題

本研究を通して、筆者は、小学校教員が感じている英語授業に対する負担や苦手意識を少しでも減らし、学級担任が子どもたちと英語でやり取りできる授業の実現を目指した。そのような授業ができれば、子どもは英語を楽しみながら力を伸ばせると信じているからである。しかし、今年度は大半の英語の授業を専科教員が担っていた。多くの教員は、採用時に英語の指導能力を求められずに教員になっており、専科がやってくれるなら任せたいと思うのは自然な流れとも言える。だが、インタビュー等で明らかになったように、実際に授業をしなければ英語は身に付かないというのもまた事実である。

担任による英語の授業を充実させるために、担任自身が授業経験を積み重ねること、自信をもって授業できるようにするための研修を保障すること、放課後に実践的な研修の機会を設けること等を、今後実現させていきたい。

本校は来年度、市の研究発表校となっており、今後も英語の研究は継続する。本研究で企画した研修の中でも、特に小中合同研修は大変有効であった。この研修を通して、小学校で確実に身に付けるべき力と中学校段階で学ぶべき内容が明確になり、小中のつながりを意識した授業づくりへの意欲が大きく高まったと言える。環境づくりとして行った掲示物の活用頻度も高く、担任が日常的に英語を意識する環境づくりにつながっていた。これらの成果を生かし、来年度に向け、担任による英語授業の充実のために努力していきたい。

## 注

- i 2019年現在、青森県内においても英語の専科教員が一部の学校に配属されている。だが、今後すべての外国語活動・外国語科の授業が専科によって担われる体制が構築されるわけではない。また、専科教員が入る場合であっても、児童の情報を持ち関係を築いている担任が授業中に英語で関わることは、「コミュニケーションとしての英語」を子どもたちに実感させる重要な機会になると考えている。
- ii 学習指導要領（2017年告示）では、小学校3・4年の外国語活動の目標は「コミュニケーションを図る素地となる資質・能力」、小学校5・6年の外国語科の目標は「コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力」、そして中学校外国語科の目標は「コミュニケーションを図る資質・能力」とされている。
- iii これを契機として、実践研究で進める校内研修においては、教科横断の単元づくりではなく、外国語活動から外国語科への円滑な接続、英語の授業づくりそのものに意識を向けることとした。本年度の研修部の活動では、小学校4年間での学習内容の系統性が見える一覧を作成している。

## 引用・参考文献

- 1) 文部科学省（2017）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説外国語活動・外国語編』
- 2) 文部科学省（2017）『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』
- 3) 直山木綿子（2019）『なぜ、いま小学校で外国語を学ぶのか』小学館
- 4) 村野井仁（2018）『小学校英語教育の基礎知識』大修館書店
- 5) 柳瀬陽介、小泉清裕（2015）『岩波ブックレット No. 922 小学校からの英語教育をどうするか』岩波書店